

看護用品の解説

使い古しのシーツやガウン，軍からの払い下げのパジャマの袖やズボンのすそを切った物で院内で使う手拭きを作った。

看護用品にまつわるエピソード

病院に営繕室がありミシンが置かれ担当の職員がいた。そこで，リネン類の繕い物などをしていた。当時，ガウンは伝染病等，産婦人科病棟，手術室で使っていた。繕えないくらいに使い古したら，それを適当な大きさに切って手拭きにした。大きさはばらばらで，布も白いものも手術室で使ったグリーンのものもあった。時には輪のままの手拭きもあった。端は切りっぱなしであったが，使い込んだ布だったのでほつれはほとんどなかった。

月に1回，看護部の主催で看護助手の集い，別名「手拭きパーティ」があった。各病棟の看護助手がはさみ持参で洗濯場に集まり，手拭きを作りながら，接遇や，トピックス，看護部からの連絡事項など情報交換をした。病棟から中央材料室への物品の返却方法などについても話し合ったりした。手拭きは洗って乾燥させた後，ケッテルに入れて滅菌した。手拭きの需要が高く，病棟によっては使用後の手拭きの扱いが悪く，返却が少なくて数が足りなくなる病棟もあり，それらも手拭きパーティで検討された。手拭きパーティは蘇我スヤ子看護部長（1972～1981年）の発案ではなかったかと思う。次の看護部長の頃（備瀬信子氏 1982年～1988年）まで手拭きパーティはしていた。

シーツ類がリースになり，感染症専門医師（遠藤先生）が就任後，手拭きは不衛生とのことでペーパータオルに替わり，手拭きづくりはなくなった。看護助手の集いはその後も続いた。

手拭き作りのような手作業は手術室でもしており，会議をする時も包帯巻きやガーゼ伸ばし，ツッペル作りなどをしていた。

（備瀬信子氏他，2004）

解説

物資の少ない時代の病院には，再生のための手作業がたくさんあった。多くの病院で衛生材料が使い捨てになり，リネン類がリースになっている現在，手間ヒマのかかる手作業は看護業務の中からどんどん姿を消していつている。このような手作業のほとんどは看護助手の仕事であったが，看護婦や看護学生も行っていた。神経を使う直接的な看護ケアとは違い，一息のつける時間であったと思われる。しかし，そのような手作業は同時に情報交換の場にもなっていた。手拭きパーティは，看護管理者からスタッフへの伝達・指導の機会でもあり，スタッフ同士の情報交換，看護部への要望を伝える場として意図的に設定されており，看護管理の見事な一例だと言える。また手拭きのように，作成から使用そして処理のサイクルが病院内で進むことは，試用後の処理を考慮した使い方や使い方を考えた作成の仕方など，物に関わるそれぞれの立場の人々が安全や利便性，経済性を考えることになったと思う。

（嘉手苺英子，2004）